『西南アジア研究』No. 95, 2022

サライはどこに？
―― ジョチ・ウルスの「首都」サライをめぐる近年の研究動向によせて ――

Where was Sarai, the “Capital” of the Jochid Ulus?: Some Perspectives for Research on Sarai

長　峰　博　之
Hiroyuki NAGAMINE

Abstract　Regarding Sarai—the “capital” of the Jochid Ulus（Golden Horde）and the “metropolis of the Qipchaq Steppe” —it is the established theory that Old Sarai was located at the Selitrennoe site on the Akhtuba river, a tributary of the Volga, and New Sarai—the Tsarevskoe site on the Akhtuba likewise. However, new theories that disagree with this have emerged : these theories claim that there was only one Sarai（Selitrennoe）, or that New Sarai was the Selitrennoe and Old Sarai was located at different places. First, I examine these new theories using some materials（including Fra Mauro’s World Map, and so on）, and show that, indeed, there may have been two Sarais, Old and New. Next, I argue the following possibilities : the lower Volga basin between Sarai and Ukek was the “capital region” of the early Jochid Ulus; Saraijuq has been discussed as being the khans’ “burial grounds（*qoruq*）”, however, from archaeological surveys and the “table of dynasty（*jadwal*）” in the Paris manuscript of *Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu‘īnī*, Sarai（and its suburbs）also assumed that role.

Keywords　Sarai（サライ）, Selitrennoe site（セリトレンノエ遺跡）, Tsarevskoe site（ツァリョフ遺跡）, “capital region”（「首都圏」）, “burial grounds”（「墓所」）

はじめに

サライはおよそ13〜15世紀にかけてキプチャク草原西部のヴォルガ川下流域に存在したジョチ・ウルスの「首都」であり（後述するように，真の「首都」は季節移動するハンの天幕であった），バトゥの西征（1236–41年）後の創建とされる［Allsen 1997；川口 2005］。著名な都市であるが，じつはサライをめぐる文献史料，貨幣資料，発掘調査の解釈についてはいまだ未解決な部分が多い［赤坂 2004］。そして，「定説」ではバトゥが建設した旧サライ（セリトレンノエ遺跡。図1参照）から新サライ（ツァリョフ／ツァリョフスコエ遺跡）に移転したとされるが，これに異を唱える「新説」が現れているのである。これらの新説は，サライは一つでセリトレンノエ遺跡，あるいは新サライこそセリトレンノエ遺跡であることなどを主張している。これらはいまのところロシア語圏の研究のなかで提唱されているのみであるが[1)]，決して無視できない重要な議論と考える。そこで本稿では，最終的な結論は出せないまでも，まずはサライの数・位置に関する議論を可能な限り検討する。あわせて，サライに関する今後の研究の可能性について，季節移動と「首都圏」，そして「墓所」の観点から新たな視座を提示することにしたい。なお，固有名詞の表記や転写の方法については小松久男他（編）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社，2005に準拠した。



図1　関係地図［Zilivinskaya, Vasilyev 2017：636をもとに筆者作成］

Ⅰ　「キプチャク草原のメトロポリス」

まず，近年の研究成果に依拠しながら，サライおよびジョチ・ウルスについて概観しておこう[2)]。

1）　ロシア語圏以外では，Vásáry 2009：74, n. 20などが注記するが，現時点ではほとんど検討されていない。

2）　サライおよびその研究史については，「旧説」に拠るものであるが，ヤクボフスキー1942，佐口 1970：372–380，会田 1998，Małowist 2010，「定説」をとるものとして，Egorov 1985：112–117，Fedorov-Davydov 1994：20–31，Allsen 1997，大旅行記：445–450などが参考になる（また川口 2005も参照）。近年の研究はほぼ定説に従う［May 2017：33–35；Favereau 2021：118–119, 237–240］（Favereau 2021は最新のジョチ・ウルス史概説であり，諫早庸一氏のreseachmap上↗

その最初期の記録は1254年のルブルクのものであり，「エティリア〔ヴォルガ〕に面してバアトゥが作った新しい町」と記されている［中世ヨーロッパ東方記：279］[3]。以後東西を往来する多くの人々がサライを訪れた。最盛期のウズベク治世（1313–41/42年）にここを訪問したイブン・バットゥータ（1332～34年の間）は，サライを「最も壮麗な町の一つ」と評し，その大規模さ，住民構成の多様さなどについて鮮明な記録を残した［大旅行記：82–83］[4]。その人口は75,000人以上とも，20万人とも推定されている［*SMIZO*–1：549–550；ヤクボフスキー 1942：289］。サライには多くのウラマーたちが滞在し，またサライ出身の学者たちが各地で活躍したことも知られている。サライは文化・学問の中心でもあった［大旅行記：83–84；*Das Mongolische*：68；*SMIZO*–1：229；Zainuddinov 2017］[5]。サライには正教会の主教が任じられ，イスラーム化以後においてもキリスト教徒たちが居住し，カトリック修道士が往来していたことも注目される［佐口 1970：234–235；Allsen 1997；Hautala 2017］。

サライが「草原の道」による東西交易ルートと南北の沿ヴォルガ交易ルートの接点に位置したことは重要であり，そこでは北方の毛皮を含む多くの交易品が取引された［ヤクボフスキー 1942：327–329；佐口 1970：376–380；Favereau 2021：154–159, 206–209］[6]。こうした交易ルートがクリミアのイタリア商人を介して黒海交易と結びつき，ヨーロッパやマムルーク朝との奴隷交易の主要ルートになったことも注目される［佐口 1970：164–167；松木 2018：39–43；Favereau 2021：231–237］[7]。興味深いところでは，アルメニア商人やアルメニア教会の主教もサライに往来・居住していた［Osipyan 2017：317］。

また，サライの名はユーラシア東西においてもよく知られていた。ヨーロッパのカタラン・アトラス（1375年）やフラ・マウロ図（1459年．図2参照）[8] などの地図上にサライ

↘ の研究ブログでも紹介されている）。後述の「新説②」をとるPachkalov 2009a；2018：25–39は簡潔かつ網羅的にサライに関する史資料と研究史を整理している。赤坂 2004は季節移動に関わる論点も提示している。

3） ジュワイニーもバトゥによるサライの創建について伝える［赤坂 2004：241］。一方，1246年にジョチ・ウルスを訪れたカルピニはサライについて言及しておらず，都市の創建がそれ以後であったことを示唆する［Favereau 2021：118］。

4） サライ訪問前後のイブン・バットゥータのクロノロジーは明確ではない。この問題については，大旅行記 420–427, 447, 450–456；家島 2017：69–74, 292–304を参照。

5） サライは「学問の中心地 majma‘ al-‘ilm」と評されている［*‘Ajā’ib*：140；*SMIZO*–1：463］。

6） それを物語るように，カタラン・アトラスには「サッラ〔サライ〕帝国 l’imperi de Sarra」から中国に向かうキャラバンが描かれ［中世ヨーロッパ東方記：786］，ペゴロッティ（14世紀前半）が示す交易ルートにも「サラ」として頻出する［中世ヨーロッパ東方記：713］。ジョチ・ウルスと交易に関する欧米圏の先行研究については，Favereau 2021に挙げられた文献を参照。

7） アブー・アルフィダー（1321年）はサライの奴隷市場について伝える［Schamiloglu 2018：24］。ジョチ・ウルスの交易ネットワークはノヴゴロドやスモレンスクを介してバルト海交易（「ハンザ同盟」）ともつながっていた［ハルパリン 2008：139–140；Khaidarov 2012；Favereau 2021：183–184］。黒海およびカフカースをめぐるジョチ・ウルス，イル・ハン国，そしてマムルーク朝の関係はFavereau 2021に詳述されるところであるが，その論旨は諫早 2022b：264–267にまとめられている。

8） フラ・マウロ図の概要，研究史，そしてロシア関係の地名については，*Fra Mauro*：91–93, ↗

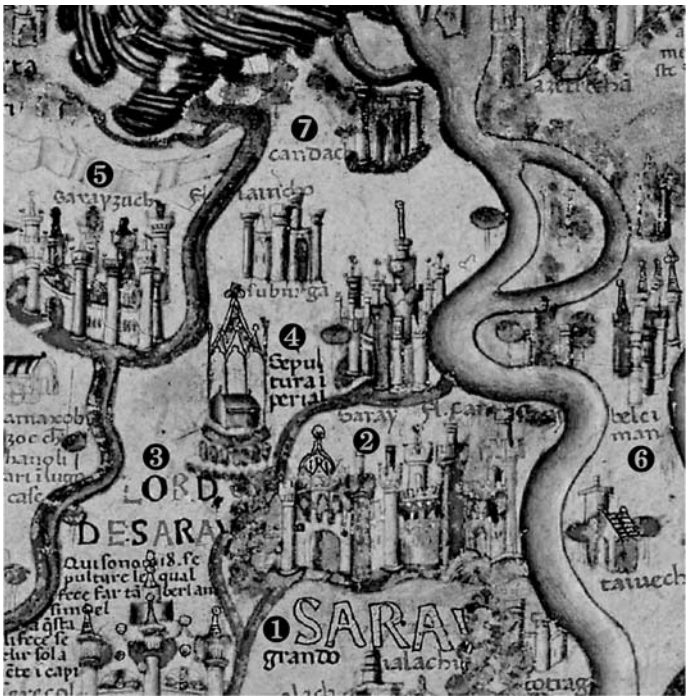


図２　フラ・マウロ図
［*Fra Mauro*: 617/2400, 623/2414, 641/2501, 643/2508, 643/2509, 643/2511, 643/2518］

が描かれ，「サッラ〔サライ〕帝国 l'imperi de Sarra」「サライのオルド LORDO DE SARAY」（図２の❸）などの表現も見られる。中国史料では「撒來〔サライ〕」として言及される［Kenzheakhmet 2017 : 772, 780］。まさに，サライは「キプチャク草原のメトロポリス」であったといえよう[9)]。

一方，現在ペスト（黒死病）に関する研究が進展しているが，一つの伝染経路として，14世紀半ばにジョチ・ウルスに到来したペストがクリミアを通ってヨーロッパや中東に拡大し

↘ Bagrow 1975 : 30–33，Tardy 1982 : 188–190，大山 2008 などを参照。大山 2008 : 63–75 にはロシア関係の地名と説明書きの一覧が *Fra Mauro* の編者 Falchetta の注とともに訳出されている。本稿でフラ・マウロ図（*Fra Mauro*）を参照する際には，スラッシュ記号の左に頁数を，右に Falchetta による地図上の地名・説明書きに対するナンバリングを示した。*Fra Mauro* にはフラ・マウロ図の画像データを収録した CD-ROM が付録されており，本稿もこれを利用した。

9） 興味深いところでは，チョーサーの『カンタベリー物語』にもサライは登場する［Pachkalov 2009a ; 菊池 2015 : 4］。諸史料にも，「サライ地方 bilād Ṣarāy」［*Géographie*, text : 216, tr : 323］，「サイン・ハン〔バトゥ〕の玉座のあるサライ地方 Sarāy vilāyatı」［チンギズ・ナーマ : 36 ; Kenzheakhmet 2017 : 771］という表現が見られる。「キプチャク草原のメトロポリス」という表現は，カラコルムを「草原のメトロポリス」と喩えた杉山の表現［杉山 1996 : 上，66–68］を援用させていただいたものである。

たと伝えられる[10]。サライは14世紀半ばのペスト，その後のジョチ・ウルスの内訌により被害を受け，そして1395年のティムールの遠征により壊滅的な打撃を被った。1438年にサライを訪れたイラン商人はその経済活動について伝えるが[11]，15世紀後半にはサライおよびその周辺はルーシ（ロシア）やシベリア・ハン国とノガイによる襲撃にさらされ，やがてサライはその歴史的役割を終えていった。

Ⅱ　サライはどこに？

以上のように，ユーラシア史上において非常に重要な役割をはたしたサライであるが，文献史料に現れる「サライ・バトゥ（バトゥのサライ）」と「サライ・ベルケ（ベルケのサライ）」，おもに貨幣資料に見られる「（旧）サライ Sarāy」と「新サライ Sarāy al-jadīda」[12]の相関性とその位置については，本格的にジョチ・ウルス史研究が開始された19世紀以来長い議論が重ねられてきた。

「旧説」では，バトゥ（1255/6年没）[13]によって旧サライ（サライ・バトゥ）が，ベルケ（在位1256?-66年）によって新サライ（サライ・ベルケ。ベルケが建設してウズベクのときに移転したとも考えられた）が建設されたとされ，前者はヴォルガ川支流のアフトゥバ河畔のセリトレンノエ遺跡に，後者は同じくアフトゥバ河畔のツァリョフ遺跡に比定された（図1）。しかしその後の研究で，サライ・バトゥとサライ・ベルケ／バラカはともに旧サライ（セリトレンノエ遺跡）のことであり，新サライ（ツァリョフ遺跡）への移転はウズベクの治世末期かその死の直後とされた。これがいまほぼ「定説」となっている[14]。

10）1346年のジョチ・ウルスによるカッファ包囲戦によりペストが広まったというガブリエーレ・デ・ムッシスの証言が知られている［Schamiloglu 2017a : 329-330］（ムッシスの証言には疑問も呈されている［Favereau 2021 : 247-250］）。ジョチ・ウルスにおけるペストについては，政治的影響のみならず，貨幣発行や移住，文学作品への影響なども議論されている［Mellinger 1991 : 178-180 ; Allsen 1997 ; Schamiloglu 2017a ; Favereau 2021 : 250-257］。一方，近年の研究は13世紀段階でのペストの拡大や伝染経路について明らかにしつつある。これについては，諫早 2020 ; 2022a : 197-201 ; 2022b : 267-268 を参照。

11）1438年，シーラーズの商人シャムス・アッディーン・ムハンマドがサライを訪れて活発な取引を行ったことが記録されている［Zakhader 1955 ; Egorov 1985 : 116-117 ; Pachkalov 2009a］。また，15世紀初頭にティムールの使節としてヨーロッパ諸国を訪問したスルターニーヤ大司教ヨハネス（ジョン）は，サライをタタールの最も重要な町と伝える［*Libellus* : 90 ; Pachkalov 2009a］。ただし，15世紀以降のサライについては新旧どちらなのか慎重に考察する必要がある。一方，16世紀にヴォルガ川を下ったジェンキンソンの記録（1558年）にはもうサライは出てこない。

12）「〔神に〕保護されしサライ Sarāy al-maḥrūsa」という銘文も見られる。この銘文のある貨幣の発行年749（1348/9）年に注目した Mellinger は，この銘文をジョチ・ウルスにおけるペストの流行と関連づけた［Mellinger 1991 : 178-179］。興味深い説ではあるが，実際にはこの銘文のある貨幣は他の年にも発行されている［cf. Pachkalov 2004 : 141］。

13）バトゥの没年については議論がある［cf. 岩村 1943 : 175-210 ; Favereau 2021 : 140, 336, n. 2］。ジョチ家の在位年，没年に関しては，赤坂 2005 巻末の「ジュチ裔系図」を参照した。

14）サライ・バラカ／ベルケの「バラカ」がアラビア語の「神の御利益」「霊験」を意味することか↗

しかし，こうした定説に異を唱える新説が現れている。議論は多岐にわたるが，以下に新説およびそれに対する反論の重要と思われる論点を整理しよう。

新説①［Evstratov 1997 ; Goncharov 2000 ; 2003 ; Rudakov 2000］[15)]

Evstratov 1997 をはじめとした新説①は以下のような論点から定説に異を唱え，サライは1つでセリトレンノエ遺跡であること，そしてツァリョフ遺跡はギュリスタンであることを主張した。

・14 世紀の諸史料のサライの位置に関する記録はセリトレンノエ遺跡を指している［Rudakov 2000 : 306–308］[16)]。
・文献史料や貨幣資料に見える「新サライ」（1342 年）[17)]，「大都市 madīna kabīra」と「小都市 madīna ṣaghīra」（14 世紀前半）［*Das Mongolische* : 68, 81 ; *SMIZO*–1 : 229, 241–242］），「近くのサライ blizhnie Sarai」と「遠くのサライ dal'nie Sarai」（1591 年）［Kobeko 1890 : 274–276］，そしてイブン・アラブシャーの記録「サライの建設からその地の〔798 年のティムールによる〕破壊の間，63 年」（その建設は 735［1334/5］年となる）［*'Ajā'ib* : 140 ; *SMIZO*–1 : 463］は，新旧2つのサライを指しているのではなく，同一都市の旧街区と新街区を指している［Goncharov 2000 : 345–347 ; Rudakov 2000 : 312–314］。
・ヨーロッパ地図のうち，ピッツィガーニ兄弟図（1367 年．図3参照）とカタラン・アトラスには1つのサライが描かれている［Rudakov 2000 : 309］[18)]。

↘ ら，イスラームに入信したベルケの名前に由来づけて使われ，旧サライがあたかもベルケによって建設されたように誤解されたという［大旅行記 : 449–450］。また，イブン・バットゥータが訪れたのは，旧説では新サライ，定説では旧サライと考えられた。旧説，新説に関連する先行研究については，注2を参照。

15） 新説については，Zilivinskaya, Vasilyev 2017 : 639–642 も参照。ただし，Rudakov はのちに新説②を支持した。

16） アブー・アルフィダーはカスピ海からサライまで2日行程［*Géographie*, text : 217, tr : 323］，イブン・バットゥータはハージー・タルハンから凍結したヴォルガ川とその支流に沿ってサライまで3日行程としている［大旅行記 : 82, 447］。ペゴロッティによれば，ハージー・タルハンからサライまで川で1日行程，サライからサライチクまで川で8日行程である［中世ヨーロッパ東方記 : 713］。後代のものとなるが，『ニコン年代記』（16 世紀）もアストラハン（ハージー・タルハン）から「大サライ Sarai Bol'shie」までヴォルガで2日行程と伝える［Grigor'ev 1876 : 278］。

17） 742 年シャウワール月（1342 年 3–4 月）にウズベクは「新サライ Ṣarāy al-jadīd」で亡くなった［*SMIZO*–1 : 254, 263, 445, 447 ; 大旅行記 : 114, n. 140］と伝えられている。ただし，ウズベクの没年については 1341 年説もある［cf. Hautala 2019 : 86, n. 130］。

18） 前者では「王の都市／首都サラ civitas regio d'Sara」［Chekalin 1889 : 17 ; Rudakov 2000 : 309 ; Volkov 2022 : 206］，後者では「サッラ市 ciutat de ssarra/Sarra」［中世ヨーロッパ東方記 : 783］と描写される。ただし定説では，サライが2つではなく1つと描かれるのは移転前の情報にもとづくためと解釈される。ここで，カタラン・アトラスで「サッラ市」のやや上流に描かれる都市「ベルキマン berchimam」について若干考察しておこう。ときにこれはサライ・ベルケ（新サライ）と解釈されてきた［杉山 2007 : 74–75 ; 中世ヨーロッパ東方記 : 783］。しかし，新旧サライはともにヴォルガ左岸とされるが，このベルキマンは右岸に描かれている。ピッツィガーニ兄弟図↗

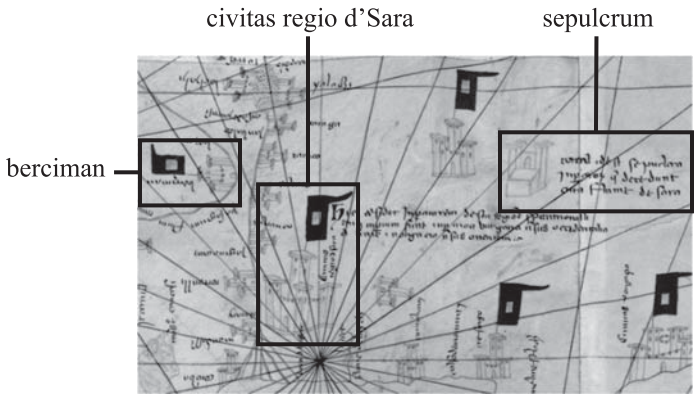


図 3　ピッツィガーニ兄弟図［Pizzgani. 1802 年の写しを利用］

・フラ・マウロ図（1459 年．図 2 参照）には ❷「サライ saray」と ❶「大サライ SARAY grando」が描かれているが，大字・金字で書かれた「大サライ」は都市名ではなく，より大きな行政単位（地方やくに）などを表している。2 つのサライを描くその後の地図はフラ・マウロ図に依拠したものである［Goncharov 2000 : 348 ; Rudakov 2000 : 309–312］。
・「首都」の移転や同時期の 2 つのサライの存在を記録する史料はない［Goncharov 2000 : 346 ; Rudakov 2000 : 312, 314］[19]。
・銀貨と違い発行地にとどまる傾向の強い銅貨に注目するならば，新サライはセリトレンノエ遺跡に比定される。貨幣発行地として知られるギュリスタンは新サライ近郊の宮殿などと考えられてきたが，それは都市であり，ツァリョフ遺跡に比定される［Evstratov 1997 : 93–103 ; Rudakov 2000 : 314–321］。

Volkov の反論［Volkov 2000 ; 2005］

新説①に対して強く反論したのは Volkov である。Volkov は以下のような論点から新説

↘ に描かれる berciman はヴォルガ川とドン川が最接近するところのドン右岸に描かれている［Chekalin 1889 : 18–19 ; Volkov 2022 : 206. 図 3 参照］。r と l の綴りが異なるが，アブー・アルフィダーはウケクとサライの間の Baljaman に言及しており［*Géographie*, text : 64, tr : 81］，これはヴォルガ右岸のヴォジャンスコエ遺跡に比定されている［Egorov 1985 : 109］。そしてフラ・マウロ図は，「サライ」「大サライ」とは別に，やはりヴォルガ右岸に belciman を描いている（図 2 の❻。*Fra Mauro* の編者 Falchetta はこの belciman とカタラン・アトラスの berchimam を同じ場所と判断している［*Fra Mauro* : 642/2511］）。すなわち，カタラン・アトラスのベルキマンはサライ・ベルケではなく，ヴォルガ右岸のヴォジャンスコエ遺跡に比定されると思われる。ただし，諸史料間で綴りが異なっていること，後述のアファナーシイ・ニキーチンの記録（1468 年）に現れる Berekezany はサライの下流と思われることなど［三海渡航記 : 33, n. 38 ; cf. Pachkalov 2009b］，まだ疑問は残る。

19)　例外として，15 世紀前半のティムール朝史料『ムイーン史選』および同史料の流れをくむ諸史料に「サライ・バトゥ Sarāy-i Bātū」と「サライ・ベルケ／バラカ Sarāy-i Berke/Baraka」が見られるが，後代の誤解とされている。

①に反対し，定説を支持した。

・フラ・マウロ図に関して，新説①の主張する「大サライ」という行政単位は史料に見出せない。フラ・マウロ図を含め，ヨーロッパ地図に描かれる2つのサライ（「(大)サライ」と「(旧）サライ」）の位置は定説に一致する［Volkov 2000 : 326–328］[20]。

・黒海交易を行うイタリア人にとって，カスピ海にいたるドン・ヴォルガ水系は重要であり，この地域は詳細に描かれた［Volkov 2005 : 323］。

・ローマ教皇からウズベクへの書簡（1338年）に「最近建設された都市」が言及されている［Volkov 2005 : 329］。

・ヴェネツィア文書の1338年に関する記録に「旧サライ Sara Veio」と「新サライ Sara Novo」が言及されている［Volkov 2005 : 329–330］。

新説②［Pachkalov 2009a ; 2018 : 40–51 ; Rudakov 2007 ; Vasil'ev 2009 ; Skisov 2010］

Pachkalov をはじめとする新説②は，ツァリョフ遺跡がギュリスタンであることを認めつつもサライは2つ，セリトレンノエ遺跡が新サライであるとした。その際，旧サライの候補地としてクラスヌイ・ヤル遺跡などを想定している。主要な論点は以下である[21]。

・セリトレンノエ遺跡からは14世紀初頭以前の層が見つからず，1330年代までの貨幣資料も少ない[22]。すなわち，セリトレンノエ遺跡の興隆は1330年代と考えられ，これは文献史料における最初の新サライの言及（1342年）と符合する。

・移転の理由は1330年代のカスピ海の水位上昇にあり，これによりヴォルガ・デルタ諸都市は大きな被害を受けた[23]。

・ヴォルガ・デルタにおいて14世紀初頭以前の貨幣資料，居住地跡，埋葬地跡をもつクラスヌイ・ヤル遺跡こそ旧サライの候補地である[24]。

20） フラ・マウロ図（図2参照）やレシナ修道院図（1525年以前．図4参照）などが考察されている。Fomenko はアンドレアス・ヴァルスペルガー図（1448年）上に「サライ Saraa」とは別に「バトゥ Batay」の都市を見出している［Fomenko 2017 : 902–903］。興味深い説であるが，Almagià はこれを kathay と読み［Almagià 1944 : 31］，Bagrow はその都市の横を流れる川をヴォルガ川ではなくアム川に比定するなど［Bagrow 1975 : 30］，この問題については慎重な検討を要する。

21） 新説②は2001年に Pachkalov によってはじめて公表された。その後，新説①を唱えた Rudakov，そして Vasil'ev らによって支持されている。以下の新説②の論点は Pachkalov 2009a に拠っている。

22） この点について，新説①は未発掘の現在のセリトレンノエ村の下に14世紀初頭以前の層があると推定した［Goncharov 2000 : 345–346］。

23） 14世紀初頭にカスピ海の水位は最高に達したとされる［Siksimov 2007 : 121–122 ; Schamiloglu 2017b : 667］。Pachkalov は，移転の推定年代とヴォルガ・デルタ諸都市の衰退の時期，そしてマリニョッリが聞いた「サライのタルタル人が洪水で破滅する」という予言（1339年）［中世ヨーロッパ東方記 : 665］とが符合することに注目している。

24） さらに Pachkalov は，フラ・マウロ図のヴォルガ・デルタに見える都市 candach（図2の❼）↗

旧サライの候補地としては，さらにアフトゥビンスコエ遺跡（クラスヌイ・ヤル遺跡のやや上流）とする説［Pigarev 2017］，13 世紀のサライは都市ではなくハンの本営だったとする説も現れている［Siksimov 2007］[25]。

考察

以上の論点をふまえ，若干の考察を試みたい。まず議論の的となっているフラ・マウロ図である（図 2．注 8 参照）。

新説①は，大字・金字で書かれた ❶「大サライ」は都市名ではなくより大きな行政単位であることを主張した。たしかに，フラ・マウロ図を見ると，ASIA，EVROPA などは大字・金字で書かれていることが確認される。しかし，すでに指摘されているように，フラ・マウロ図の別の箇所の説明書きに「大サライ saray grando」と「小サライ saray piçolo」があることは重要であろう［*Fra Mauro* : 607/2350 ; Tardy 1982 : 190 ; Allsen 1997 ; Fomenko 2017 : 904］[26]。❶「大サライ」の上には大都市が描かれており，他に都市名を示すものは見あたらない[27]。やはりフラ・マウロ図上の「大サライ」は都市名と考えられる[28]。

また，Volkov が提示したローマ教皇からウズベクへの書簡とヴェネツィア文書は大いに注目に値する。これらは前者の校訂テクストおよびロシア語訳注を公表した Hautala によっ

↘ を「首都」移転後のクラスヌイ・ヤル遺跡に比定している［Pachkalov 2010 : 304–307］。ところで，ヴォルガ・デルタはかつて遊牧国家ハザルの「首都」イティルが存在した場所である。さらにアルメニアの歴史家ヘトゥム（1307 年）は，クマン人の中心都市サライをタルタル（モンゴル）人が破壊して奪ったと伝える［*History of the Tartars* : 7］。サライがクマン人の中心都市だったというのはヘトゥムの誤解であるが［Pubblici 2022 : 36］，先行する遊牧国家の拠点とサライの位置の相関性の有無というのも重要な論点ではないだろうか。

25） Petrov らも，ベルケ治世に都市ではなく「宮殿 dvorets」としてのサライにおいて貨幣が発行された可能性を指摘している［Petrov et al. 2018］。

26） 「小サライ」はサライチク（「小サライ」の意）を指しているという可能性も考えられるが，サライチクはフラ・マウロ図においては sarayzuch（図 2 の❺）と表記されている。また，「大サライ」のさらに上流に描かれるもう 1 つのサライ Calmuzi Sara については，Pachkalov 2008 を参照。

27） 「大サライ SARAY grando」のうち，SARAY が大字・金字で記され，grando は青字・小字で記されている。一つの可能性として，「大サライ」は地域名でもあり都市名でもあったことも考えられるかもしれない（同様の事例として「リビア・マルマリカ LIBIA marmarica」［*Fra Mauro* : 399/1097］があり，集落のような図の下に，LIBIA は大字・金字で，marmarica は小字・青字で記されている）。

28） また興味深いことに，フラ・マウロ図の説明書きにはジョチ・ウルスとティムールの戦いに関する情報が散見され［*Fra Mauro* : 623/2414, 625/2430, 633/2465, 645/2526 ; Fomenko 2017 : 903］，フラ・マウロがジョチ・ウルス（およびティムール）に関する情報をある程度もっていたことが推察される。一方，イル・ハン国および中国地図においては様相が異なる。ムスタウフィー『心魂の歓喜』（1339–40 年），「経世大典輿地図」（1331 年），「混一疆理歴代国都之図」（15 世紀）にはサライは描かれず，ジョチ・ウルスに関する情報も少ない［杉山 2007 : 67–68 ; 2012 : 12 ; 宮紀子 2007 : 115–118 ; Kenzheakhmet 2015 : 146–149 ; 2017 : 773.「経世大典輿地図」には「月祖伯〔ウズベク〕所封地即太祖長子朮赤〔ジョチ〕之後」とは記されている］。ユーラシア東西の地図におけるジョチ・ウルスおよびサライの認識の差異は非常に興味深いところである。

て詳細に検討され，「最近建設された都市」すなわち「新サライ」の創建は「1338 年の少し前」であるという見解が示された［Hautala 2019 : 81–84, 479–480］。

以上から，文献史料中にサライに関して現れる「新サライ」，「大都市」と「小都市」，「近くのサライ」と「遠くのサライ」という表現を考え併せても，やはりサライは 2 つあったと考えるのが妥当と思われる。その移転の時期については，イブン・アラブシャーの伝える（新）サライ創建の年（735［1334/5］年）や Hautala の見解などを考慮すると，ウズベク治世の 1330 年代（あるいはそれ以前）と現時点では推定される[29]。

それでは，2 つのサライはどこにあったのか。

定説が唱えたように，そして Volkov が再度指摘したように，ヨーロッパ地図上の「（大）サライ」と「（旧）サライ」の位置は定説の新サライ＝ツァリョフ遺跡，旧サライ＝セリトレンノエ遺跡に一致するように見える（図 2, 4 参照）[30]。

一方，新説の議論の出発点となったのは，前述の Evstratov の貨幣学的分析にもとづいた「新サライ＝セリトレンノエ遺跡（およびギュリスタン＝ツァリョフ遺跡）」説であり，新説の多くがこの説を前提としている[31]。しかし，Evstratov の貨幣学的分析は興味深いものではあるが，すでに Volkov によってサンプル数の少なさなどの不備が指摘されている［Volkov 2000 : 334–337］[32]。残念ながら詳細な貨幣学的分析は筆者の能力を超えるが，新説を展開していくためには，より説得力のある貨幣学調査により「新サライ＝セリトレンノエ遺跡」説を補強・証明する必要があるだろう。

29） May は新サライの建設を 1332 年，そこへの移転を 1341 年とし［May 2017 : 34］，Favereau はその移転を「1330 年代のいつか」とする［Favereau 2021 : 238］。移転の時期については，君主の季節移動とともに「首都」も移動していた可能性も含めて［赤坂 2004 : 241］，今後も継続して検討すべき問題である。一方，新サライ貨幣の発行はジャーニーベク治世（在位 1342/3–57 年）からとされる［Yanina 1954 : 437–438, Fedorov-Davydov 1994 : 21–22］。これに対して，Ağat はトクタ（在位 1291–1312/3 年）の新サライ貨幣（710［1310/1］年）およびウズベクの新サライ貨幣（727［1326/7］年，731［1330/1］年）について言及しているが［Ağat 1976 : 57, 59］，これらの図は示されていない。Ağat の出典を確認すると，Markov 1896 : 446 にウズベクの 722（1322/3）年の新サライ貨幣，*Numizmaticheskii kabinet* : 84 に 731 年の新サライ貨幣があるが，残念ながらやはり図はない（トクタの新サライ貨幣の出典は示されていない）。トクタおよびウズベクの新サライ貨幣については検証が必要と思われる。

30） また興味深いことに，18 世紀にはツァリョフ遺跡をジョチ・ウルスの「首都」に結びつける言説が現れていたことが確認される［Rudakov 2000 : 308–309］。

31） Rudakov も，銅貨に注目した貨幣学的分析から同説を支持している［Rudakov 2000 : 314–321 ; 2007 : 21–23］。ジョチ・ウルスの銅貨については，安木 2021 も参照。

32） 「首都」サライやギュリスタンの銅貨は広く普及したこと，住民が大量に逃亡する際に銅貨も移動した可能性などが指摘されている。Evstratov はセリトレンノエ遺跡から出土する新サライ貨幣の「数」ではなく，他の発行地の貨幣に対する「割合」を重視し，その割合が高い発行年の回数を数えている［Evstratov 1999 : 97–98］。たしかに，セリトレンノエ遺跡出土の新サライ貨幣の割合が高い発行年の回数は，ツァリョフ遺跡のそれよりも多い（前者は 18 回，後者は 7 回）。ただし，貨幣が大量に発行されたジャーニーベク治世とヒズル治世を除くと出土貨幣の数が 1 桁台の年が多く，1 枚のみで割合が高いとされているのが 5 例確認される。

それでも，いくつか考えるべき重要な論点がある。まず，セリトレンノエ遺跡からは14世紀初頭以前の層が見つからず，1330年代までの貨幣資料も非常に少ないことは重要だろう。すなわち，発掘調査によるセリトレンノエ遺跡の興隆期は1330年代であり（新説②），これは前述の推定される新サライへの移転の時期に符合する。

文献史料に立ち返ると，サライの位置に関する情報を含む史料のほとんどは14世紀前半に集中しており，それらはセリトレンノエ遺跡を示していると考えられる（注16参照）。しかし，14世紀前半というのは推定される移転の時期と重なっており，それらの記述が新旧どちらのサライに関するものなのかの判断は難しい[33]。移転後の記述であっても，移転前の情報にもとづいている可能性もある。

13世紀の史料で唯一サライの位置に関する具体的な情報を伝えるのがルブルク（1254年）であり，サライ近くのいくつかのヴォルガ川支流について記録している［中世ヨーロッパ東方記：280］。定説ではこの記述はセリトレンノエ遺跡を示すと考えられてきたが，新説②をとるVasil'evによればこれはヴォルガ・デルタの描写であり，サライの位置はクラスヌイ・ヤル遺跡を指すとされる［Vasil'ev 2011 : 64–67］[34]。以上のように，13〜14世紀の文献史料からサライの位置を特定するのはなかなかに困難なのが現状である。

15世紀以降についてはティムールによる（新）サライ破壊を考慮する必要がある。Fedorov–DavydovやEgorovはティムールによる新サライ（ツァリョフ遺跡）破壊後には旧サライ（セリトレンノエ遺跡）が1つのサライとして存続したと考えたが［Egorov 1985 : 113, 116–117 ; Fedorov–Davydov 1994 : 23］，新説②では新サライ（セリトレンノエ遺跡）はティムールによる破壊後に復興したとされる［Pachkalov 2009a］。15世紀以降のサライに関する文献史料についても，その記述の解釈やそこに現れる地名の比定などをめぐって議論が交わされているが，まだ結論をみていない[35]。

33） 目撃証人であるイブン・バットゥータの情報は非常に貴重であるが，そのサライ（セリトレンノエ遺跡）訪問前後のクロノロジーが明確ではないことにくわえて（注4参照），まさに推定される移転の時期に彼はサライを訪れたことになり，その新旧の判断は難しい。すなわち，定説ならば旧サライを訪れたことになるが，新説②ならばそれは新サライとなる。また，アブー・アルフィダー（1321年）のサライに関する情報がセリトレンノエ遺跡を示しているのは注目される（そこに示される北緯48度というのは同遺跡とツァリョフ遺跡の間にあたる。ただし，北緯54度という異説も伝えている［*Géographie*, text : 216–217, tr : 322–323］）。この記述の解釈についても，移転の時期とあわせて考える必要がある。

34） 関連して，ルブルクに言及されるスムメルケントの位置については諸説があるが，Vasil'evはそれをモシャイク遺跡（アストラハンの東）に比定し，バトゥと並んで季節移動していた息子サルタクの本営があった場所がハージー・タルハン（アストラハン）であるとしている［Vasil'ev 2011 : 67–70 ; Zilivinskaya, Vasilyev 2017 : 642–643］。

35） ロシア商人アファナーシイ・ニキーチン（1468年），ヴェネツィア使節アンブロージオ・コンタリーニ（1476年），ロシア商人フェドト（フョードル）・コトフ（1623〜24年），『大地図書』（1627年）の記録などが議論されている［cf. Rudakov 2000 : 308 ; 2011 ; Volkov 2000 : 333–334］。これらの史料に言及される「オルダ」あるいは「ゾロタヤ・オルダ Zolotaya Orda」［三海渡航↗

2つのサライをめぐる議論は錯綜しているが，新説が現れたことによりあらためて注目された視点がある。それは，移転の要因がカスピ海の水位上昇に求められたこと［Pachkalov 2009a］，そしてギュリスタンの興隆にペストの影響が関連づけられたことである[36]。これらの説については今後さらなる検討が必要ではあるが，こうした古気候学や環境史の成果の導入は，資史料の少ないジョチ・ウルス史において新たな可能性を秘めている［cf. 諫早 2022a : 189–197. 注 10, 23 も参照］。

以上，サライの数・位置をめぐる議論を検討してきた。小結として，資史料からはやはりサライは2つ存在したと考えられるが，その位置に関しては，残念ながら，現時点では明解な解答は出せない[37]。またあらためて，なぜ史料上にサライの移転が記録されなかったのかも疑問として残る。この問題については，本稿でも検討するように，そもそも季節移動する遊牧政権にとって都市としての「首都」とは何なのか，そして「首都」の移転とは何なのかという問いも含めて，継続して考えていく必要があるだろう（注 29 参照）。しかし，新説の登場によりサライ（およびギュリスタン）をめぐる議論が深化しつつあるのは確かである。今後のさらなる文献史料，発掘および貨幣学調査の進展を待ちたい。

Ⅲ　季節移動と「首都圏」

モンゴル帝国君主の季節移動についてはこれまでも多くの研究が積み重ねられてきており，そのなかで遊牧国家における「首都」と「首都圏」が議論されてきた［本田 1991 : 357–381 ; 杉山 2004 : 128–167 ; 白石 2002 : 330–337 ; 2017 : 160–171］[38]。大都の首都機能について検討した杉山は，その特徴を ① 軍事都市の要素が薄いこと，② 文書庫としての側面，

↘ 記：32–33 ; *Khozhenie* : 30 ; *Kniga* : 143–145］の比定は非常に重要な問題であるが，これについても，ツァリョフ遺跡［三海渡航記：33, n. 35 ; Rudakov 2000 : 308 ; Volkov 2000 : 333］，ハンの本営［Pachkalov 2009b］など見解は分かれている。もしハンの本営だとすれば，該当する可能性があるのは，「大オルダ」のアフマド（在位 1465?–81 年），あるいはニキーチンが言及する「アストラハンのハン」（マフムード［在位 1459–66?年］）かその息子「スルタン・カシム」（カースィム［在位 1466–］）などであろう［三海渡航記：33–34 ; Zaitsev 2004 : 40–41 ; Trepavlov 2010 : 63］。

36） 例えば Evstratov は，ギュリスタンの興隆の理由をこの時期にペストの被害を被った地域からの移民に求めている［Evstratov 1999 : 104］。

37） サライの位置を考察するにあたって，黒海交易と結びつくドン・ヴォルガ水系という視点も重要と思われる。一方で，ペゴロッティが紹介するタナ～ハージー・タルハン間のルートは陸路であり［中世ヨーロッパ東方記：713］，後述するように，イブン・バットゥータ訪問時のウズベクの本営は北カフカースのマージャル～ビシュ・ダグにあった［大旅行記：32–33, 48］。すなわち，クリミア～ヴォルガ下流域間においては（北カフカースを経由する）陸路も重要だったのであり［cf. Pachkalov 2018 : 80–85］，サライの位置の考察に際しては水路・陸路両方の視点が必要であろう。

38） イル・ハン国の事例を検討した本田は，アラタグ，アッラーン，スルターニーヤ，シヤーフ・クーフで囲われる地域をイル・ハン国の「腹裏の地 qol-un ulus」と呼んでいる［本田 1991 : 379］。

③ 経済機能の集中，④ 文化宗教都市の 4 点にまとめたうえで，大都が「圧倒多数を占める漢人たち」を「住まわせる城」であったこと，そして見せるための「モニュメンタル・シティー」であったことを指摘している［杉山 2004 : 156–164］。その「首都圏」の特徴は季節性をもつ 2 つの「首都」（冬営地と夏営地）による「両京制」であるが，それはたんなる 2 つの「点」としての両京制ではなく，君主の季節移動圏のなかに各種の都市が点在する「面」としての両京制であった。「首都圏」とは，「遊牧民の季節移動の生活パターンと，統治のための〔軍事・統治・経済的〕政治装置」を同時に兼備する多機能な場であったとされる［杉山 1996 : 下，22–25 ; 白石 2002 : 336–337］[39]。諸史料・先行研究によって明らかにされているサライの特徴は，杉山の提示する首都機能にほぼ合致する（ただし，「② 文書庫としての側面」は確認できない）[40]。Favereau は，ジョチ・ウルスのハンにとって都市は第一には「増加する定住民の需要」に応えるためのものであったが，交易，宗教，そして手工業の中心としてのサライの発展はハンの名声を高めたと述べている［Favereau 2021 : 119］。

一方，ジョチ・ウルスのハンも天幕に居住して季節移動していたのであり，統治の中心としての真の「首都」はサライではなくハンの天幕であった［Allsen 1997 ; Favereau 2021 : 122］[41]。初期のジョチ・ウルスのハンたちの季節移動については諸史料に具体的な情報があり，それらによれば，ヴォルガ川下流域のサライ～ハージー・タルハンを冬営地，ウケク[42]～ブルガルを夏営地とする季節移動を行っていたことがわかる［Atwood 2015 : 302–303 ; Schamiloglu 2018 : 19–20, 24–25 ; 吉田 2019 : 324–325 ; Favereau 2021 : 125–127］。サライ～ハージー・タルハンからウケク～ブルガルにかけてのヴォルガ川下流域沿岸には都市遺跡が集中しており［cf. Zilivinskaya, Vasilyev 2017 : 636］，まさにこの地域がジョチ・ウルス初期の「首都圏」だったと考えられよう[43]。また，カルピニは他のジョチ家の季節移動について伝えており［中世ヨーロッパ東方記 : 77］，Favereau はバトゥや息子サルタクの「オルド」にくわえて，大河に沿って移動する「オルド」が少なくとも他に 7 つあったと想定している［Favereau 2021 : 127］[44]。

39） そこでは，「アウラガ首都圏」「カラコルムーオンギ首都圏」「大都ー上都首都圏」が議論されている。関連して，元の大都・上都・中都の意義や［渡辺 2021］，ティムール朝における両京制と首都圏をめぐる議論［川口 2013］なども注目される。

40） 「① 軍事都市の要素が薄いこと」については，サライ（セリトレンノエ遺跡）には「市壁」がなかったと伝えられており［*Das Mongolische* : 81 ; *SMIZO*–1 : 241 ; 大旅行記 : 448］，発掘調査によってもそれは裏づけられている。ツァリョフ遺跡からは塁壁や堀の跡が確認されるが，創建当初のものではないと考えられている［佐口 1970 : 378 ; Fedorov–Davydov 1994 : 30 ; 会田 1998 : 9 ; 赤坂 2004 : 241］。

41） ルーシ諸公はサライではなくハンの天幕（オルダ）を訪問した。Favereau は，「モンゴルは馬上で統治した」と述べている［Favereau 2021 : 119］。

42） ウケクについては，Schamiloglu 2018 を参照。また，ウケクに関する地図・文献史料は Volkov 2022 によって網羅的に検討されている。

43） Favereau もこの地域がジョチ・ウルスの「中核 core」だったと述べる［Favereau 2021 : 125］。

44） Favereau はドナウ川，ドニエストル川，ドニエプル（ドニプロ）川，ドン川，ヴォルガ川，ウ↗

ただし，ジョチ・ウルスのハンたちの季節移動に関する史料は分量・時代ともに限定されており，まだ不明な点が多い。後代の史料ではあるが，アブルガーズィー『テュルク系譜』（1665 年）は，シバン（バトゥの弟）の夏営地がウラル川東岸・ウラル山脈東麓から西シベリアにかけてであり，冬営地がシル川流域から現在の南カザフスタン方面であったことを伝え，シバンの子孫（14 世紀後半）についても，ヤイク川上流域で夏営してシル川河口で冬営していたと伝える［堀川 1991 : 171–172］。またウマリーによれば，ジョチ・ウルスの君主たちは，冬はサライで過ごし，夏はアルク・タグ（ウラル山脈に比定される）に向かうという［Schamiloglu 2018 : 20, n. 3］。これらは Favereau が想定する 1 つの大河に沿った季節移動とは異なるものであり，ジョチ・ウルスにおける季節移動がより多様であったことを窺わせる[45]。

また，イブン・バットゥータによれば，ウズベクの冬営地はサライ～ハージー・タルハンであったが［大旅行記 : 54–55, 82］，Yurchenko や諫早が注目するように，イブン・バットゥータ訪問時（1332～34 年の 5～6 月）のウズベクの本営は北カフカースのマージャル～ビシュ・ダグ（クマ川上流のピャチゴルスクもしくはミネラーリヌィエ・ヴォードゥィに比定される）にあった［大旅行記 : 32–33, 48, 105, n. 90, 117–118, n. 151］[46]。Atwood によれば，政治に左右されるハンたちの「帝国の巡行 imperial itinerance」は「移動牧畜 mobile pastoralism」とは異なるものであり，それは権力を示すための移動でもあった［Atwood 2015 : 332–333 ; cf. Favereau 2021 : 109–111］。そして諫早は，ウズベクの北カフカースへの移動の背景に，黒海交易の活性化やイル・ハン国との係争地であるアゼルバイジャンとの関連のなかで，北カフカースの地政学上の重要性が高まったことがあった可能性を指摘してい

↘ ラル川，アム川，シル川，そしてイルティシュ川に沿ったジョチ家の季節移動図を提示している［Favereau 2021 : 129］。また同図においては，南北を行くジョチ家の季節移動と，東西を走る駅伝制（ジャムチ）が交差・連動することも示されている［Favereau 2021 : 129–130］。示唆に富む図であるが，必ずしも実証されたものではなく，多分に仮説的なものであることには注意が必要である。ジョチ・ウルスの駅伝制については，Zilivinskaia 2017 も参照。

45） この他，シル川中・下流域がジョチ・ウルス左翼にとって重要な冬営地であったことが知られる［長峰 2003 : 2, 7］。14 世紀後半の事例であるが，シャーミー『勝利の書』によれば，テムル・マリク（トカ・テムル家）はカラティル／カラタル（シル川近郊とされる［*SMIZO*–2 : 295］）に冬営した［*Histoire des Conquêtes* : 77–78］。また後代の史料であるが，ウテミシュ・ハージー『チンギズ・ナーマ』（16 世紀半ば）は，断片的ながらオロス（トカ・テムル家）の季節移動やカン・バイ（シバン家）の夏営地がコカダイ・イスブガという場所にあったことなどを伝える［チンギズ・ナーマ : 45–51 ; *Kara* : 53–57, 127–131］。

46） Yurchenko はマージャルをウズベク期の夏の「首都」に位置づけており［Yurchenko 2016 : 69–71］，諫早はマージャルは夏営地への移動途上の重要な通過点，あるいはビシュ・ダグも含めた域圏としての夏営地の可能性を指摘している［諫早庸一「両海の覇者たち：ジョチ・ウルスにおける〈移動〉のポリティクス」（第 58 回野尻湖クリルタイ，2022. 7. 16）を参照させていただいた（『スラヴ研究』70，2023 に掲載予定）］。関連して，ジョチ家のカフカースにおける牧地については，ルブルクによれば，ベルケが「鉄門〔デルベント〕の方に放牧」していたが，バトゥにより「エティリア〔ヴォルガ〕の向こうの東に移動するよう命じ」られたという［中世ヨーロッパ東方記 : 207 ; 赤坂 2005 : 143］。

る[47]。ジョチ・ウルスのハンたちの季節移動については，政治状況の変化にも鑑みながら，今後より多面的かつ動態的にとらえられる必要があるだろう。

Ⅳ　ハンたちの「墓所」

最後に，ジョチ・ウルスのハンたちの「墓所 qoruq」の問題について考えたい。周知のように，モンゴル帝国初期の君主の墓所は秘されていた［Bartol'd 1966 : 383–388 ; 白石 2015］。ジューズジャーニー『ナースィル史話』（1259/60 年）は，バトゥの墓所もまた秘されたことを伝える［Favereau 2021 : 117］[48]。しかし，イル・ハン国においてはおよそイスラーム化以後に墓廟建築がはじまったことが知られる［羽田 1990 : 4–8 ; 濱田 2020 : 98–101］[49]。14 世紀前半のシル川流域のスグナクにはイスラーム建築物がつくられ，ジョチ・ウルス左翼のハンの墓がおかれたことが伝えられており［長峰 2003 : 5–6］，同様の状況がイスラーム化以後のジョチ・ウルスにもあったことが類推される[50]。

ジョチ・ウルスの墓所としてこれまで議論されてきたのは，ウラル川下流域のサライチクである［Bartol'd 1966 : 395 ; DeWeese 1994 : 193–199 ; Trepavlov 2001 : 589 ; 2011 : 372–373 ; 野田 2007 : 3–6 ; Favereau 2021 : 116–118］。その史料的根拠としては，『テュルク系譜』がトクタグ（トクタ. 在位 1291–1312/3 年）とジャーニーベク（在位 1342/3–57 年）がサライチクに埋葬されたと伝えていることがある［*Histoire des Mogols* : 174, 176］[51]。

47） 諫早「両海の覇者たち」。

48） イル・ハン国の墓所／禁地については，本田 1991 : 376–377 を参照。カルピニは，「知らずしてフンガリアで殺された者たちの墓地の境界内に入ったところ，彼らが飛んで来て弓で射ようとした」という興味深い逸話を伝える［中世ヨーロッパ東方記 : 44］。

49） イル・ハン国のガザン（在位 1295–1304 年）による墓廟建築については，これまでラシード・アッディーン『集史』の記述が注目されてきた。一方，ムスタウフィー『選史』もガザンの墓廟について伝えており，「モンゴルの帝王たちの血統のなかで，彼以前のいかなる帝王もその墓は明らかではなかった」と述べている（この興味深い記述は諫早庸一氏よりご教示いただいたものであり，訳文は諫早氏と長瀬篤音氏による翻訳を参照させていただいた［諫早氏の researchmap 上の研究ブログで公開されている］）。

50） カザフスタンのウルタウにある伝ジョチ・ハン廟［cf. 長峰 2020 : 61–63］についても，放射性炭素（^{14}C）年代測定を用いた最近の研究により，イスラーム化以後の 14 世紀の創建であることが示された。それはやはりジョチのものではなく，あるジョチ家の人物の廟がジョチに関連づけられるようになったと考えられている［Panyushkina et al. 2022 : 328–329 ; Usmanova et al. 2022 : 76–77］。ただし，ジョチ・ウルスのイスラーム化の諸相については今後も慎重に検討すべきテーマである。

51） 『テュルク系譜』はバトゥがサライチクを創建したと伝え［*Histoire des Mogols* : 172］，サライチクはハンたちの即位の場だったともされる［cf. Favereau 2021 : 116–118］。ただし，Pachkalov は，『テュルク系譜』のサライチクはサライの誤りであろうとしている［Pachkalov 2009a］。またカーディル・アリー・ベクの史書は，カースィム（カザフ・ハン国. 在位 1512–18 年）はサライチクで亡くなり，墓はサライチクにあると伝える［Qādir ʻAlī Bek/SPb : 152b ; Qādir ʻAlī Bek/Kazan' : 65b–66a ; 野田 2007 : 5］。

一方，諸史料にはジョチ・ウルスのハンたちの死地や埋葬をサライに関連づける記述がいくつかある[52]。ベルケの埋葬の事例を見てみよう。

> 途上，彼〔ベルケ〕は病となり，亡くなった。彼の棺をサライ・バトゥ Sarāy-i Bātū に運び，埋葬した。[*Jāmi'*/Istanbul : 242b ; *Jāmi'*/Rawshan : 1062][53]

サライに関する新説の展開のなかで，以前から知られていたが，あらためて注目されたのがラパス遺跡（図 1 参照）の墓廟群である。かつて Egorov はその 4 つの巨大な墓廟跡を，イスラームを受容したベルケ，ウズベク，ジャーニーベク，ベルディベク（在位 1357–1360/1?年）のものと推定した［Egorov 1985 : 117–118］[54]。近年ラパス遺跡の調査を進めている Vasil'ev によれば，さらにいくつかの墓廟跡が見つかっており，Vasil'ev はそれらをウズベクと息子ティニベク，その親族のものと推定している［Vasil'ev 2001 : 72 ; 2018 : 25 ; Zilivinskaya, Vasilyev 2017 : 643］[55]。

地図史料に目を向けよう。ピッツィガーニ兄弟図（図 3）には「サラ〔サライ〕」の近くに建築物が描かれており，「サラ川近くで亡くなる帝王たちの廟 sepulcrum」と説明されている［Chekalin 1889 : 20–21 ; Egorov 1985 : 117］。そしてフラ・マウロ図は，❶「大サライ」と ❷「サライ」の間に ❹「帝国の墓所 sepultura imperial」（図 2 参照）として壮麗な建築物を描いている。レシナ修道院図（図 4）では「サライ Saray」と「旧サライ



図 4　レシナ修道院図［Goldschmidt: 1944］

52）　バトゥ，ウズベクはサライで亡くなったと伝えられる［*Jāmi'*/Rawshan : 736. *Jāmi'*/Istanbul : 165b ではバトゥの死地を示す地名サライが脱落している。ウズベクについては，注 17 参照］。

53）　同様の記述は『シャイフ・ウワイス史』（14 世紀後半）『キプチャク・ハン史』（18 世紀前半）などにも見られる［Nasonov 1940 : 119, n. 1 ; Pachkalov 2009a.『キプチャク・ハン史』は，ベルケが「サライの町で，彼の兄弟バトゥ・ハンのそばに埋葬された」と伝え（*Tārīkh-i Qipchāq Khānī* : 396b），バトゥもサライに埋葬されたことを示唆する。しかしこれは，もともとは「サライ・バトゥに埋葬された」という意味だった文が後代に誤解された結果である可能性があり，その扱いには慎重を要する］。興味深いところでは，キリスト教に入信したクトゥカン（トクタの兄弟）もサライに埋葬されたという［Hautala 2019 : 14–21］。また，エヴリヤ・チェレビ（17 世紀）も，伝承的ながら，サライの墓廟について伝える［Pachkalov 2009a］。

54）　Egorov はさらに，バトゥを含むイスラーム受容前のハンたちの埋葬地もここにあったと推定している。

55）　出土する貨幣がウズベク治世の 1312〜42 年に集中していることも Vasil'ev は指摘している。

Eschisari」の間に「ダウラトハーナ Dolatcana」がおかれる［Goldschmidt 1944 : 274–275］[56]。さらに，『大地図書』（1627 年）は，「Tsaritsyn（ツァリョフ遺跡）」と「Chogat（ジギト＝セリトレンノエ遺跡）」[57] の間に「5 つのタタールの寺院，Beshkiz」があったとしている［*Kniga* : 143, 145］。すなわち，これらがラパス遺跡を指すと考えられているのである［Rudakov 2000 : 308, 313 ; Vasil'ev 2001 : 71–72 ; 2018 : 25］[58]。

フラ・マウロ図について少し補足しよう。同図において，❹「帝国の墓所」がこれまでジョチ・ウルスの墓所として議論されてきた ❺「サライチク sarayzuch」とは別に描かれているのは注目に値する。また，フラ・マウロ図には多くの墓が描かれているが，「帝国の墓所」とされるのは，ここと「中国 CHATAIO」方面にやはり壮麗に描かれるチンギス家のものだけであり［*Fra Mauro* : 679/2734］[59]，これらが特別視されていたことが窺われる。

いま 1 つ，ティムール朝史料『ムイーン史選』（15 世紀前半）パリ写本の「青帳 Kök Orda」と「白帳 Aq Orda」の「王朝表 jadwal」［*Muntakhab* : 303b］を取り上げよう[60]。「王朝表」にある「埋葬地 madfan-hā」を整理すると以下のようになる（左が君主名，右が埋葬地）［cf. Nagamine 2019 : 42, 44–45］。

56） 同様の情報は他のいくつかの地図にも見出せる［Volkov 2000 : 331–332 ; Ibrisov, Khanmurzaev 2021 : 771, 773］。

57） 新説②によれば，セリトレンノエ遺跡を聖者ジギト・ハージーの埋葬地とする伝承があり，「ジギト」は「ジャディード（新）」の転訛と考えられている［Pachkalov 2009a］。

58） ピッツィガーニ兄弟図の「廟」はサライからやや東に離れており，サライチクを指している可能性も指摘されている［cf. DeWeese 1994 : 195–196 ; Trepavlov 2001 : 589］。「ダウラトハーナ」についてはさらに慎重な検討が必要である。「ダウラトハーナ」は一般に「宮殿」などの意味であり，サファヴィー朝においても「シャーが滞在し，政務を行う場」を意味した（古いダウラトハーナが廟になった事例もある）［後藤 2021 : 8, n. 14, 15］。Volkov はこの Dolatcana こそをギュリスタンに比定している［Volkov 2000 : 337］。関連して，ラパス遺跡に同定されるアク・サライ［Vasil'ev 2001 : 69］を，ヴェネツィア人はギュリスタンとみなしていた可能性があることも注目される［Hautala 2019 : 633, n. 21］。

59） 「中国」方面に描かれるチンギス家の「帝国の墓所」の説明書きは，マルコ・ポーロの記述にもとづいている［*Fra Mauro* : 678/2729］。

60） 「王朝表」は Aubin による『ムイーン史選』校訂本に含まれなかったため，これまであまり注目されてこなかった。「王朝表」については，川口 2007 : 140–143 を参照。『ムイーン史選』では「青帳」がジョチ・ウルス「右手 dast-i rāst」，「白帳」が「左手 dast-i chap」とされているが，実際は逆である［cf. 川口・長峰 2013 : 37–41］。ここで，『ムイーン史選』と同じ著者に帰される可能性の高いトプカプ宮殿博物館附属図書館蔵アルバム B. 411［cf. 川口 1995 : 157–159 ; 2007 : 147–157］は，「青帳」と「白帳」を正しく比定しているという Binbaş の指摘は大きな注目に値する［B. 411 : 140b ; Binbaş 2018 : 184, n. 28］。ただし，B. 411 にはやはり『ムイーン史選』と同様に「青帳」を「右手 ong qol」，「白帳」を「左手 sol qol」と呼んでいる箇所もあり［B. 411 : 140b］，情報は錯綜している。この問題については稿を改めて論じてみたい。

青帳の君主たち salāṭīn
バトゥ―**サライ**，ベルケ―**サライ**，モンケ・テムル―**スグナク**，トダ・モンケ―**サライチク**，トクタ―**サライチク**，トグリル―**サライ**，ウズ・ベク―**サライ**，ジャーニー・ベク―**サライ**，ベルディ・ベク―**サライ**，ケルディ・ベク―**サライ**，オルダ・シャイフ―**「人々が破壊した」**，ヒズル―**サライ**，フラファ／フルファ―**「荒野に倒れた」**，テムル・ホージャ―**「人々が破壊した」**，ムリード―**「サライに**［ある］dar Sarāy**」**，アズィーズ―**サライ**，ハーチー〔ハージー〕―**サライ**

白帳の君主たち
サシ・ブガ―**スグナク**，エレゼン／エルザン―**スグナク**，チェルケス―**スグナク**，ムハンマド〔ムバーラク〕・ホージャ―**スグナク**，チムバイ／ジムバイ―**スグナク**，オロス―**スグナク**，トクタキヤ―**スグナク**，テムル―**スグナク**，トクタミシュ―**スグナク**，［空欄］―**スグナク**，［空欄］―~~**スグナク**~~ **サマルカンド**[61]，テムル・クトルグ―~~**スグナク**~~ **サライ**，シャーディー・ベク―~~**スグナク**~~ **サライ**，テムル・スルターン―~~**スグナク**~~**「シルヴァーンに**［ある］dar Shirwān**」**，ジャラール・アッディーン―~~**スグナク**~~ **サライ**，［空欄］[62]―**「サライに**［ある］dar Sarāy**」**，チェキレ／チャキラ―**「サライに**［ある］dar Sarāy」

すなわち，「青帳」のハン 17 人のうち「サライ」を埋葬地とするのが 11 人，「サライチク」が 2 人，「スグナク」が 1 人となり，「白帳」のハン 17 人のうち「スグナク」が 10 人，「サライ」が 5 人となる。『ムイーン史選』のジョチ・ウルスに関する記述の不正確さは夙に指摘されるところであるが［cf. 川口・長峰 2013 : 37–39］，一方で，「王朝表」の「ラカブ laqab–hā」，「大アミール amīr al–umarā'」などに他の史料（『チンギズ・ナーマ』）と共通する情報があるのも確認され，不正確さはあれども著者がジョチ・ウルスに関するある程度の情報を有していたことが窺われる［Nagamine 2019 : 42–45］。「王朝表」にある「埋葬地」の情報の信頼性については個別の検討が必要だが，少なくとも，サライがサライチクやスグナクと並んで「埋葬地」と認識されていたとはいえるのではないだろうか。

以上から，サライおよびその近郊（ラパス遺跡）にジョチ・ウルスのハンたちの墓所があった可能性が指摘できよう。もちろん，墓所の問題はサライの位置に関する問題と深く関わるものであり，ともに今後さらに検討していかなければならない課題である。

61） 以下，「スグナク」を訂正して「サマルカンド」や「サライ」などとしており，こうした訂正も興味深いところである。
62） おそらく「ジャラール・アッディーン」と書いた後に訂正しているが，訂正後の名前が書かれていない。『ムイーン史選』本文によれば，スルターン・ムハンマドが該当する。

おわりに

サライはいくつあったのか，そしてどこにあったのか？　資史料からはサライはやはり2つ存在したと考えられるが，その位置については，残念ながら本稿は明解な解答を示せてはいない。しかし，新説の登場によるサライをめぐる議論の深化を受けて，いくつかの論点を提示することはできたのではないかと思う。くわえて，ジョチ・ウルスにおける季節移動と「首都圏」という視座を提示し，サライおよびその近郊の「墓所」としての可能性を指摘した。全体的に明確な結論のない予備的な考察にとどまってしまったが，それでも，本稿が今後のサライおよびジョチ・ウルス研究の一助になれば幸いである。

［付記］　本稿は科学研究費（19K01029）による成果の一部である。本稿の内容については，第57回日本アルタイ学会（野尻湖クリルタイ）の席上において多くの貴重なご意見を，とくに，諫早庸一氏にはその後も有益なご助言をいただきました。ここに記して謝意を表します。また，じつに的確なコメントをよせていただいた査読者の方々にも感謝申し上げます。

参考文献

'Ajā'ib: Ibn 'Arabshāh, *'Ajā'ib al-Maqdūr fī Nawā'ib Tīmūr*. Aḥmad Fāyz al-Ḥimṣī（ed）. Beirut, 1986.

B. 411: Ms. Topkapı Sarai Müzesi Kütüphanesi, B. 411.

Das Mongolische: Das Mongolische Weltreich: Al-'Umarī's Darstellung der mongolischen Reiche in seinem Werk Masālik al-abṣār fī mamālik al-amṣār. K. Lech（ed）. Wiesbaden, 1968.

Fra Mauro: P. Falchetta, *Fra Mauro's World Map: with a Commentary and Translations of the Inscriptions*. J. Scott（tr）. Turnhout, 2006.

Géographie: *Géographie d'Aboulféda*. M. Reinaud（ed）. Paris, 1840 ; M. Reinaud（tr）2（1）. Paris, 1848.

Histoire des Conquêtes: Histoire des Conquêtes de Tamerlan, Intitulée Ẓafarnāma par Niẓāmuddīn Šāmī. F. Tauer（ed）. Praha, 1937.

Histoire des Mogols: *Histoire des Mogols et des Tatares par Abu l-Ġāzī Bahādur Ḫān*. Le Baron Desmaisons（ed）1. St. -Pétersbourg, 1871 ; repr. Frankfurt am Main, 1994.

History of the Tartars: Het'um the Historian, *History of the Tartars: The Flower of Histories of the East*. R. Bedrosian（tr）. 1977 ; revised Sophene Books, 2021.

Jāmi'/Istanbul: Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*. Ms. Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Revân Köşkü 1518.

Jāmi'/Rawshan: Rashīd al-Dīn *Jāmi' al-Tawārīkh*. M. Rawshan and M. Mūsavī（eds）4 vols. Tehran, 1373Kh.

Kara: Utemish-khadzhi, *Kara tavarikh*. I. M. Mirgaleev et al.（ed and tr）. Kazan', 2017.

Khozhenie: *Khozhenie kuptsa Fedota Kotova v Persiyu*. N. A. Kuznetsova（ed）. Moskva, 1958.

Kniga: *Kniga Bol'shomu Chertezhu*. K. N. Serbina（ed）. Moskva and Leningrad, 1950.

Libellus: Johannes de Galonifontibus, *Libellus de notitia orbis*. L. Tardy, The Caucasian Peoples and Their Neighbours in 1404. *ActOH* 32(1). 1978, 83–111.

Muntakhab: *Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu'īnī*. Ms. Bibliothèque Nationale, Supplément Persan 1651.

Pizzigani: *Manuscript copy of 1367 manuscript chart of the Mediterranean, with Black and Caspian Seas, and the coasts of northwest Africa and western Europe*. Library of Congress Geography and Map Division, 2020587733.

Qādir 'Alī Bek/Kazan': Qādir 'Alī Bek's Historiography. Ms. Otdel rukopisei i redkikh knig Nauchnoi biblioteki im. N. I. Lobachevskogo Kazanskogo federal'nogo. un-ta, T. 40, 0b-69a.

Qādir 'Alī Bek/SPb: Qādir 'Alī Bek's Historiography. Ms. Vost. otdel Nauchnoi biblioteki im. M. Gor'kogo SPb gos. un-ta, MSO. 59.

SMIZO-1: *Sbornik materialov, otnosyashchikhsya k istorii Zolotoi Ordy* 1. *Izvlecheniya iz sochnenii arabskikh*. V. Tizengauzen（ed and tr）. Sanktpeterburg, 1884.

SMIZO-2: *Sbornik materialov, otnosyashchikhsya k istorii Zolotoi Ordy* 2. *Izvlecheniya iz persidskikh sochnenii*. V. G. Tizengauzen et al.（ed and tr）. Moskva and Leningrad, 1941.

Tārīkh-i Qipchāq Khānī: Qipchāq Khān, *Tārīkh-i Qipchāq Khānī*. Ms. Bibliothèque Nationale, Supplément Persan 187.

三海渡航記：中沢敦夫『アファナーシイ・ニキーチンの三海渡航記』翻訳と註釈（1）『人文科学研究』103，2000, 25–42.

大旅行記：イブン・バットゥータ（著）イブン・ジュザイイ（編）家島彦一（訳注）『大旅行記』4，平凡社，1999.

中世ヨーロッパ東方記：高田英樹（編訳）『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会，2019.

チンギズ・ナーマ：ウテミシュ・ハージー（著）川口琢司・長峰博之（編）菅原睦（校閲）『チンギズ・ナーマ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2008.

Ağat, N.（1976）*Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları Kataloğu 1250–1502*. İstanbul.

Allsen, T. T.（1997）Saray, or Sarai. *EI*^{2}.

Almagià, R.（1944）*Monumenta Cartographica Vaticana 1, Planisferi, Carte Nautiche e Affini Dal Sec. XIV al XVII Esistenti Nella Biblioteca Vaticana*. Città del Vaticano.

Atwood, C. P.（2015）Imperial Itinerance and Mobile Pastoralism: The State and Mobility in Medieval Inner Asia. *Inner Asia* 17(2), 293–349.

Bagrow, L.（1975）*A History of the Cartography of Russia up to 1600*. H. W. Castner（ed）. Ontario.

Bartol'd, V. V.（1966）K voprosu o pogrebal'nykh obryadakh turkov i mongolov. in *Sochineniya* 4. Moskva, 377–396.

Binbaş, E.（2018）Condominial Sovereignty and Condominial Messianism in the Timurid Empire: Historiographical and Numismatic Evidence. *JESHO* 61, 172–202.

Chekalin, F. F.（1889）Saratovskoe Povolzh'e v XIV veke po kartam togo vremeni i

arkheologicheskim dannym. (S 2-mya kartami). *Trudy SUAK* 2(1), 14-25.

DeWeese, D. (1994) *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*. University Park.

Egorov, V. L. (1985) *Istoricheskaya geografiya Zolotoi Ordy v XIII-XIV vv*. Moskva.

Evstratov, I. V. (1997) O zolotoordynskikh gorodakh, nakhodivshikhsya na mestakh Selitrennogo i Tsarevskogo gorodishch (opyt ispol'zovaniya monetnogo materiala dlya lokalizatsii srednevekovykh gorodov Povolzh'ya). *Epokha bronzy i rannii zheleznyi vek v istorii drevnikh plemen yuzhnorusskikh stepei* 2. Saratov, 88-118.

Favereau, M. (2021) *The Horde: How the Mongols Changed the World*. Cambridge and London.

Fedorov-Davydov, G. A. (1994) *Zolotoordynskie goroda Povolzh'ya*. Moskva.

Fomenko, I. (2017) The Heritage of Chinggis Khan's State on European Maps of the 15-18th Centuries. in R. Khakimov et al. (eds), *The Golden Horde in World History*. Kazan, 902-918.

Goldschmidt, E. P. (1944) The Lesina Portolan Chart of the Caspian Sea: with a Commentary by G. R. Crone. *The Geographical Journal* 103(6), 272-278.

Goncharov, E. Yu. (2000) Staryi i novyi Sarai — stolitsa Zolotoi Ordy (novyi vzglyad na izvestnye istochniki). *Stepi Evropy v epokhu srednevekov'ya* 1. Donetsk, 345-350.

Goncharov, E. Yu. (2003) "…stradaet sil'noi netochnost'yu" (demonstratsiya nauchnykh fokusov s posleduyushchim ikh razoblacheniem). *Nizhnevolzhskii arkheologicheskii vestnik* 6, 318-328.

Grigor'ev, V. V. (1876) O mestopolozhenii Saraya, stolitsy Zolotoi Ordy. in *Rossiya i Aziya*. S.-Peterburg, 259-321.

Hautala, R. (2017) Catholic Missionaries in the Golden Horde. in *The Golden Horde in World History*, 323-328.

Hautala, R. (2019) *V zemlyakh «Severnoi Tartarii»: Svedeniya latinskikh istochnikov o Zolotoi Orde v pravlenie khana Uzbeka (1313-1341)*. Kazan'.

Ibrisov, Yu. M., Khanmurzaev, I. I. (2021) «Rukopisnyi portulan Kaspiiskogo morya 1519 goda» Veskonte Madzholo kak istochnik po istoricheskoi geografii Prikaspiya. *Zolotoordynskoe obozrenie* 9(4), 768-790.

Kenzheakhmet, N. (2015) Central Asian Place Names in the *Kangnido*. *Journal of Asian History* 49, 141-160.

Kenzheakhmet, N. (2017) The Tūqmāq and the Ming China: The Tūqmāq and the Chinese Relations during the Ming Period (1394-1456). *Zolotoordynskoe obozrenie* 5(4), 770-785.

Khaidarov. T. F. (2012) Torgovye otnosheniya Ganzeiskogo soyuza i Zolotoi Ordy (1262-1357gg.). *Zolotoordynskaya tsivilizatsiya* 5, 335-339.

Kobeko, D. F. (1890) K voprosu o mestopolozhenii goroda Saraya, stolitsy Zolotoi Ordy. *Zap. vost. otd. imp. russk. arkh. obshch.* 4, 267-277.

Markov, A. (1896) *Inventarnyi katalog musul'manskikh monet Imperatorskogo Ermitazha*. S. Peterburg.

May, T. (2017) Sarai. in T. May (ed), *The Mongol Empire: A Historical Encyclopedia* 1. Santa

Barbara and Denver, 33–35.

Mellinger, G. M.（1991）The Silver Coins of the Golden Horde: 1310–1358. *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 7, 1987–91, 153–211.

Małowist, M.（2010）New Saray, Capital of the Golden Horde. R. Kimball（tr.）. in J. Batou and H. Szlajfer（eds.）. *Western Europe, Eastern Europe and World Development, 13th–18th Centuries: Collection of Essays of Marian Małowist*. Leiden and Boston, 325–338.

Nagamine, H.（2019）On the *Jadwal* of Kök Orda and Aq Orda in the Paris Manuscript of *Muntakhab al-Tawārīkh-i Mu'īnī*. in *«Sarïarqa jäne Altïn Orda: waqït pen kengístík»*. Qaraghandï, 40–48.

Nasonov, A. N.（1940）*Mongoly i Rus' (Istoriya tatarskoi politiki na Rusi)*. Moskva and Leningrad.

Numizmaticheskii kabinet: *Numizmaticheskii kabinet* 3. *Katalog vostochnykh monet*. Moskva, 1886.

Osipyan, A.（2017）Armenians. in *The Golden Horde in World History*, 316–323.

Pachkalov, A. V.（2004）Monetnye dvory Zolotoi Ordy i ikh lokalizatsiya. *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 13, 131–183.

Pachkalov, A. V.（2008）Calmuzi Sara na karte Fra-Mauro（1459 g.）. *Istoriya i sovremennost'* 2, 64–71

Pachkalov, A. V.（2009a）Ocherk po istorii Starogo i Novogo Saraev — stolits Zolotoi Ordy. *Azerbaidzhan i azerbaidzhantsy* 103/104(1/2), 122–128.

Pachkalov, A. V.（2009b）O nizhnevolzhskikh toponimakh «Khozheniya za tri morya» Afanasiya Nikitina. *Drevnyaya Rus'* 3(37), 85–86.

Pachkalov, A. V.（2010）K voprosu ob imeni zolotoordynskogo goroda, nakhodivshegosya na meste Krasnoyarskogo gorodishcha v del'te Volgi. *Srednevekovye tyurko-tatarskie gosudarstva* 2. Kazan', 300–309.

Pachkalov, A. V.（2018）*Zolotaya Orda po dannym numizmaticheskikh istochnikov*. Moskva.

Panyushkina, I. P. et al.（2022）Chronology of the Golden Horde in Kazakhstan: ^{14}C Dating of Jochi Khan Mausoleum. *Radiocarbon* 64(2), 323–331.

Petrov, P. N. et al.（2018）Monety Saraya pervoi poloviny 660-kh gg.kh / 1260-kh gg. *Zolotoordynskoe obozrenie* 6(1), 145–158.

Pigarev, E. M.（2017）Del'ta Volgi v XIII–XV vv. in *Trudy V (XXI) vserossiiskogo arkheologicheskogo s"ezda v Barnaule — Belokurikhe* 2. Barnaul, 287–291.

Pubblici, L.（2022）*Mongol Caucasia: Invasions, Conquest, and Government of a Frontier Region in Thirteenth-Century Eurasia*（1204–1295）. A. Smaldone（tr）. Leiden and Boston.

Rudakov, V. G.（2000）K voprosu o dvukh stolitsakh v Zolotoi Orde i mestopolozhenii goroda Gyulistana. *Trudy GIM* 122, 305–323.

Rudakov, V. G.（2007）*Selitrennoe gorodishche: khronologiya i topografiya*. Avtoreferat dis. na soisk. uchenoi stepeni kand. ist. nauk. Moskva.

Rudakov, V. G.（2011）Vnov' o puteshestvii A. Kontarini, Sarayakh i ne tol'ko . . . *Stepi Evropy v epokhu srednevekov'ya* 13. Donetsk, 307–322.

Schamiloglu, U.（2017a）The Impact of the Black Death on the Golden Horde: Politics, Economy,

Society, Civilization. *Zolotoordynskoe obozrenie* 5(2), 325–343.

Schamiloglu, U. (2017b) Climate Change in Central Eurasia and the Golden Horde. in *The Golden Horde in World History*, 661–673.

Schamiloglu, U. (2018) The Rise of Urban Centers in the Golden Horde and the City of Ükek. *Zolotoordynskoe obozrenie* 6(1), 18–40.

Siksimov, D. A. (2007) Problema lokalizatsii Saraya XIII veka v sovremennoi istoriografii. *Vestnik VolGU* 4(12), 117–126.

Skisov, S. Yu. (2010) Voprosy datirovki i khronologii Krasnoyarskogo gorodishcha v zolotoordynskii period. in *Arkheologiya Nizhnego Povolzh'ya: problemy, poiski, otkrytiya*. Astrakhan', 375–384.

Tardy, J. (1982) A Contribution to the Cartography of the Central and Lower Volga Region. in A. Róna-Tas (ed), *Chuvash Studies*. Wiesbaden, 179–236.

Trepavlov, V. V. (2001) *Istoriya Nogaiskoi Ordy*. Moskva.

Trepavlov, V. V. (2010) *Bol'shaya Orda — Takht eli: Ocherk istorii*. Tula.

Trepavlov, V. V. (2011) Zolotaya Orda posle raspada: vospominaniya o edinstve. in *Tyurkologicheskii sbornik 2009–2010*. Moskva, 360–383.

Usmanova, E. R. et al. (2022) Mavzolei Dzhuchi-khana: realii, legendy i obryad. *Arkheologiya evraziiskikh stepei* 3, 74–80.

Vásáry, I. (2009) The Jochid realm: the western steppe and Eastern Europe. in N. Di Cosmo et al. (eds), *The Cambridge History of Inner Asia: The Chinggisid Age*. Cambridge, 67–85.

Vasil'ev, D. V. (2001) Gorodishche Ak-Sarai. in *Arkheologiya Nizhnego Povolzh'ya na rubezhe tysyacheletii*. Astrakhan', 69–72.

Vasil'ev, D. V. (2009) K voprosu o mestopolozhenii pervoi stolitsy Zolotoi Ordy. *Zolotoordynskoe nasledie* 1. Kazan', 436–444.

Vasil'ev, D. V. (2011) O puti Gil'oma Ruburka cherez del'tu Volgi i o naselennykh punktakh, kotorye on posetil. *Zolotoordynskoe nasledie* 2, Kazan', 64–72.

Vasil'ev, D. V. (2018) Mavzolei u poselka Lapas: vzglyad iz kosmosa. *Arkheologiya evraziiskikh stepei* 4, 24–33.

Volkov, I. V. (2000) Stolitsy Zolotoi Ordy vo vneshnikh istochnikakh. *Trudy GIM* 122, 324–339.

Volkov, I. V. (2005) Okonchatel'noe reshenie voprosa o starom i novom Sarayakh i blesk novatorov. *Nizhnevolzhskii arkheologicheskii vestnik* 7, 323–333.

Volkov, I. V. (2022) Nekotorye kartograficheskie i narrativnye istochniki ob Ukeke. *Arkheologiya evraziiskikh stepei* 3, 204–242.

Yanina, S. A. (1954) Dzhuchidskie monety iz raskopok i sborov Kuibyshevkoi ekspeditsii v Bolgarakh v 1946–1952 gg. *Materialy i issledovaniya po arkheologii SSSR* 42, 424–484.

Yurchenko, A. G. (2016) Madzhar kak odna iz ordynskikh stolits vremeni pravleniya khana Uzbeka. in *Materialy pervogo Madzharskogo arkheologicheskogo foruma. Pyatigorsk — Budennovsk — 2012 god*. Kazan', 57–73.

Zainuddinov, D. R.（2017）Uchenyi iz Saraya ― Mavlyana Zada as-Sarai（754/1353-791/1389）― v biograficheskom slovare al-Makrizi Taki ad-Dina（766/1365-845/1441）«Kitab al-mukaffa al-kabir»（Bol'shaya rifmovannaya kniga）. *Zolotoordynskoe obozrenie* 5(1), 126-137.

Zaitsev, I. V.（2004）*Astrakhanskoe khanstvo*. Moskva.

Zakhader, B. N.（1955）Shirazskii kupets na Povolzh'e v 1438 g.（K voprosu o russkikh ekonomicheskikh svyazyakh s Sibir'yu, Srednei Aziei i Perednim Vostokom）. *Kratkie soobshcheniya Instituta vostokovedeniya* 14, 14-19.

Zilivinskaia, E. D.（2017）Caravanserais in the Golden Horde. *The Silk Road* 15, 13-31.

Zilivinskaya, E., Vasilyev, D.（2017）Cities of the Golden Horde. in *The Golden Horde in World History*, 630-660.

会田理人（1998）ジョチ・ウルスにおけるサライの遷都『史朋』31, 1-27.

赤坂恒明（2004）キプチャク草原の都市遺跡：3つのサライ（ロシア，カザフスタン）『NHK スペシャル 文明の道5 モンゴル帝国』NHK 出版，240-241.

赤坂恒明（2005）『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房.

諫早庸一（2020）13-14 世紀アフロ・ユーラシアにおけるペストの道『現代思想』5 月号，青土社，137-144.

諫早庸一（2022a）ユーラシアから考える〈14 世紀の危機〉『史苑』82(2), 185-211.

諫早庸一（2022b）キエフとモスクワのあいだ：前近代アフロ・ユーラシア史からの視界『現代思想』6 月臨時増刊号，青土社，262-270.

岩村忍（1943）『蒙古史雑考』白林書房.

大山知児（2008）フラ・マウロ世界図（1459 年）記載ロシア関係の地名・注記について ―― 15 世紀「西欧」の一つのロシア観 ――『立正史学』103, 42-78.

川口琢司（1995）トプカプ宮殿博物館図書館蔵『ティムール家総覧』『上智アジア学』13, 157-171.

川口琢司（2005）サライ　小松久男他（編）『中央ユーラシアを知る事典』平凡社, 217.

川口琢司（2007）『ティムール帝国支配層の研究』北海道大学出版会.

川口琢司（2013）ティムールの冬営地と帝国統治・首都圏『史学雑誌』122(10), 1-38.

川口琢司・長峰博之（2013）ジョチ・ウルス史再考『内陸アジア史研究』28, 27-51.

菊池秋夫（2015）チョーサーの「近習の話」におけるモンゴル帝国表象『東北ロマン主義研究』2, 1-14.

後藤裕加子（2021）タブリーズの王宮地区サーヒブアーバード ―― ポスト・モンゴル王朝の都市建設 ――『西南アジア研究』92, 1-29.

佐口透（1970）『東西文明の交流 4　モンゴル帝国と西洋』平凡社.

白石典之（2002）『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社.

白石典之（2015）チンギス・カンの墓　白石典之（編）『チンギス・カンとその時代』勉誠出版, 312-338.

白石典之（2017）『モンゴル帝国誕生：チンギス・カンの都を掘る』講談社.

杉山正明（1996）『モンゴル帝国の興亡 上 軍事拡大の時代・下 世界経営の時代』講談社.

杉山正明（2004）『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会.

杉山正明（2007）東西の世界図が語る人類最初の大地平　藤井譲治他（編）『大地の肖像：絵図・地図が語る世界』京都大学学術出版会，54–83.

杉山正明（2012）描かれたアフロ・ユーラシア ―― モンゴル時代のイスラーム地図と東西の諸都市 ――　窪田順平（編）『ユーラシアの東西を眺める ―― 歴史学と環境学の間 ――』総合地球環境学研究所，7–25.

長峰博之（2003）「キプチャク草原の港」スグナク ―― 1470～90 年代のトルキスタン地方をめぐる抗争とカザクのスグナク領有を中心に ――『史朋』36, 1–23.

長峰博之（2020）ゾロタヤ・オルダ 750 周年国際会議参加報告 ―― 付伝ジョチ・ハン廟参詣記 ――『日本中央アジア学会報』16, 58–66.

野田仁（2007）カザフ・ハン国とトルキスタン ―― 遊牧民の君主埋葬と墓廟崇拝からの考察 ――『イスラム世界』68, 1–24.

羽田正（1990）「牧地都市」と「墓廟都市」―― 東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設 ――『東洋史研究』49(1), 1–29.

濱田正美（2020）聖者の執り成し ―― 何故ティムールは聖者の足許に葬られたのか ―― 松原正毅（編）『中央アジアの歴史と現在：草原の叡智』勉誠出版，94–117.

ハルパリン，C. J.（2008）中村正巳（訳）『ロシアとモンゴル：中世ロシアへのモンゴルの衝撃』図書新聞.

堀川徹（1991）遊牧ウズベク史研究（1）『COSMICA』20, 165–177.

本田実信（1991）『モンゴル時代史研究』東京大学出版会.

松木栄三（2018）『ロシアと黒海・地中海世界：人と文化の交流史』風行社.

宮紀子（2007）『モンゴル帝国が生んだ世界図』日本経済新聞出版社.

ヤクボフスキー（1942）金帳汗国首都サライの研究　ヤクボフスキー，グレコフ（共著），播磨楢吉（訳）『金帳汗国史』生活社，283–365.

家島彦一（2017）『イブン・バットゥータと境域への旅：『大旅行記』をめぐる新研究』名古屋大学出版会.

安木新一郎（2021）大モンゴルの少額貨幣 ―― ジョチ朝（キプチャク・ハン国）における銀貨・銅貨交換比率について　岩橋勝（編著）『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』晃洋書店，269–283.

吉田順一（2019）『モンゴルの歴史と社会』風間書房.

渡辺健哉（2021）元代の三都（大都・上都・中都）とその管理　櫻井智美他（編）『元朝の歴史：モンゴル帝国期の東ユーラシア』勉誠出版，45–54.

（小山工業高等専門学校）